

「お嬢様のお机の上に置いてございました」と、行雄に渡す。行雄は裏を見
て「これは、緑さんからぢやないか」と、訝がる。「はい、奥さまと、貴耶
とお二人宛に二通残してございました」。「緑さんは何處かへ行つたのか」
「昨夜からお歸りになりませんでしたのでございませう、お寢床も其儘になつて居
ります」。「昨夜から歸らん？」行雄は眉を蹙めて手紙の封を切る。お松も不
審さうに「お嬢さまが？」お梅は微聲で「今朝お掃除に行つて氣が附いたの
何の氣なしにお部屋障子を開けると、驚くぢやないか、本箱から置時計か
ら、何から何まで一際召財、押入へ藏ひ込んで、お座敷には剥き出しの机一
脚限で其上に書置やうのものが二通あるだらう、お寢床の中は勿論藻抜の
殻、私や、慄然として、身の毛が竦立つたけれど、お嬢さまに限つて、そん
なことの有らう筈はないと思つて居るけれど、若しやといふこともあるから、
私鼻で嗅いで見たの」。「何を嗅いだのさ？」。「生臭くはわるまいかと思つ

て」。「馬鹿をお云ひでないよ」お松はお梅を睨む、お梅は、眞顔になつて、
「だつて、お手紙の御容子ぢや、何うだか分りやしないもの」云つたが「萬
々、そんなことはわりやしまいし、まだ、有られてはならないのだけれど」
と、言ひ直す。行雄は、讀みさした手紙を右手に攪んで、休めの姿勢だ。茫
乎と空を見て居たがやがて、獨語のやうに「ぢやア、また男爵とは名
乗り合はないんだな」お松も、お梅も口を噤んで、沈と行雄を睨める。行雄
は、また手紙を讀む。少時、人の聲は止むで、庭の青葉を叩く雨と、軒を傳
ふ栗の音が聞こゆる。「だらうと思つた。行雄は、さも、憎さげに云つたが
矢張り、手紙からは目を離さず、今度は「ふうむ」と、吐息のやうな息で嘆し
た「見上げた女だなア……」云ひながら眼を上げる、心では泣いて居るら
しい。「若様お嬢さまは何うなさいましたのでございます」と媚びるやうに
聞くお松の顔を、行雄は見下して、「一旦誓つたことは、身を捨て、も守る

といふ、貴様のやうな雑兵輩には出来んてつた。初江さんは見上げた女ぢやないか」お松は、昂然として「どうせ、私などは雑兵ばらでございませう。初江さんはおエラうでございませう」「エライよ、實際、初江さんはエライ、貴様らのやうに、二言目には、口穢なく罵り合ふのとは違つて、暖かい友誼があるぢやないか」お松は何と履き違へたか「それや、初江さんは華族さまですもの、私たちのやうな平民とは事が違ひます」云つて、目をバチ／＼、口元をヒリ／＼さす。行雄は、それに取り合はず、類と感嘆して居たが、併し、「縁さんも好く懺悔した、これだけは褒めてやる」云つて、手紙をポケットに突込み、脚下の外套を拾ひ上げて、「初江さんのことは、何とかせすばなるまいなア」折から、階下の玄関口で、「お歸りツ」と喚く聲がする。

(五十三)

彌八郎は、窮屈さうにフロックコートを着て、麻の半帛で、禿げた額の汗を拭き拭き座敷へ入る、後ろから、お蔭が、飯焚の三に加勢をして貰つて、重さうに赤革の大靴を提げて来る。お松やお梅は遅ればせに馳せ参じて、次の間から、「お歸り遊ばせ」と兩手を支く。彌八郎は軽く頷いて見せ、矢庭にコートを脱ぎかけて、「邦子も、縁も、初江さんも何うした、行雄は、もう出勤したか」嬌然な機嫌である。お蔭は、其處に指先を置いて、「若様も奥さまも被居いますが、お嬢様と初江さんは……」云ひかけて、お松やお梅と顔を見合はす。「二人が何うした？」彌八郎は、服を脱ぎながら聞てく、お蔭は不斷着を後ろから被せかける、と、丁度、離座敷の方から邦子が、白い紋羽二重の二枚襲を擁き抱へて、衣摺の音荒々しく、廊下傳ひに走つて来たが、良人の顔を見ると、よた／＼後ろへ退つて、分もなく笑ひ崩れる。彌八郎、女中共も、きよとんとしてゐる。邦子は立ち上つて、

「蕙」被せかけたお蕙の手を支へて、「そんなものを被せて何うします、お客さまを誰だと思ひですか」怖ろしく光る眼で睨め附けて「侯爵の若様ぢやないか、男爵とは段が違ひます、二段も三段も上手の方へお嫁にやるのに、そんな、そんな汚ない組服を着せて……、お前は私の大事な娘に恥を掻かせる積なんだね、云つて睨めたが、「それでは、緑が可哀想です」邦子は聲を上げて泣く。お蕙は、呆れながらも怖氣さして、着物の襟を持つたま、後ろへ退る。邦子は、また氣を替へて、「それ、こゝに、丁と阿母さんが用意をして置きました、これを着るんですよ、云ひく、良人に二枚襷を被せかける、彌八郎は驚いて、「何をやる、馬鹿」邦子は、紋服の襟を掴んで、疊の上を引き摺りながら「はは、はは、はははは」と、薄氣味悪く笑ふ。彌八郎は合點の行かぬ態で、其様子を見て居たが、手敏く、お蕙に脊中を向けて、衣物を着せかけさせると、古帯を巻き附けながら、「一體

何うしたといふのぢや？」云つて、女中共を見廻はす、松も、蕙も、梅も、只、呆れた眼を睨るばかりである。「行雄は居らんか、行雄は、彌八郎は氣がでない。」「被居います」とお松が立ちかける。「呼んで来い、彌八郎が命ける間に、行雄は外套を右に抱へ、左手に劍を提げて、悠々と現はれる。彌八郎は見て、「おう、行雄？」「伯父さん……」行雄の顔は顰んでゐる。「行雄、私の留守に何かあつたか」落ちつかぬ聲である。「緑さんは家出しました」「家出した？……」「小學校の教師にでもなつて、四五年は歸らんさうです」「な、何故また家出せにやならんのぢや」彌八郎は、緑にでも詰問する口調である。「深い理由があります、緑さんには、情夫があつたのです」彌八郎は、聞く間もなく、首垂れて、聞き返す勇氣も無かつた。邦子は、襷を膝上に抱いたま、誰かと對向した格好に座つて、「學校の先生なぞさす爲めに、丹精を凝して今日が日まで育てはいたしません、緑を返して

下さい、い、い、二年も三年も待てません、直ぐに直ぐに返へして下さい、
 嘴み付くやうに云つて、膝で突つか、彌八郎は、邦子を腕力で自分の
 方へ向かせて、「邦子、好く〜考へて見なさい、私が云はんこつちやアな
 い、娘の子を何時までも一人で置いては、怪我の原ちやと口の酸ばくなるは
 といふものを、お前は、華族でなければ嫁れんの、位が低くては可けないの
 と虚榮ばかり云つて、望みをするものぢやから斯んなことになつて了つた
 のぢや、學校の先生が嫌ひでも、墮落した娘は、貰ひ人がないだらう、情な
 いといふ顔である。邦子は、其顔を見るとまた、可笑さうに笑ひ崩れる。そ
 こへ車夫の金瓶が出て来て、「警察から持つて来ました」と、二通の紙片を差
 し出す。行雄が其れを受けて。「これや、初江さんと、縁さんの召喚状だが
 ……」不審の思ひ入れをしたが「うむ」と頷いて、「僕が代人となつて出
 頭する」

(五十四)

「其指環は、返してお呉れなされ」犯人が巡査に引ツ立てられて留置所の方
 へ行つた後、椅子に凭つて居た田萬里は、斯う云つて警部を見る。中村警部
 は、放火犯事件の聴取書に、筆を書き入れて、片邊の書類の上に積み重ねる
 と、また、指環を捻繰りながら、「此方へ出なさい」と、田萬里を正面に掛
 けさせ、今は渡せん」「何故であります、それは、私の妻に貰うたのであり
 ます、返してお呉れなされ」云つて漆濃く手を出す、中村は「不可と云へば
 いかん」と、一つ睨んで、「少し、取調べる必要があるから、暫く私が預つ
 て置く」今度は物優しくいふ、「貴下は警官でありますやう」田萬里は目を据
 へて居る、中村は、少し笑つて、「無論、警官だ」「警官たるものが、他人
 の指環を奪つて好いのですか」「奪るのではない、取調の必要があるから

「預つて置くのだ」「所有主の承諾なくして、預るといふ法はありませぬ、若し強ひて、預るとお云ひなさるなら、預證を書いて下さい」「黙れッ中村警部は卓子を叩いて「馬鹿もよい加減にしる」「いふ處へ受付巡查が一枚の名札を持つて来て、恭々しく警部の前に差し出す。「村山緑、柳井初江の代人として来られたさうです」中村は、名札を見て、此方へ案内して呉れ玉へ」やがて巡查に導かれて、中村警部の前に出たのは、軍服の藤井中尉であつた。警部は起立して、叮嚀に敬禮を交し、呼鈴を鳴らせる。「給仕が首履を突かけて出て来ると、警部は中尉の方を向いて、切と敬語雜りの應答をしながら、「應接室の椅子に、お茶を持つて来い」命令る。間もなくお茶が来る、中尉は、給仕の勤める椅子に凭つて、兩脚の間でサーベルを杖つきすると、「其指環を、誰か貰つたといふものがあるのですか」「さうです」「ははア」中尉は嫣然して「其男に一度逢ひたいものですね」「これが、

其男です」警部は笑顔で田萬里を指す。藤井中尉は、昵乎と、田萬里を見る、田萬里も氣味悪るげに、中尉を見返したが、見る／＼蒼くなつて椅子から立上る。「ふむ、君が、田萬里？」藤井は落ちて着いて、蔑んだ眼を笑はせながら、「君には、廣島でもお目にかゝつたねわ」田萬里は、戦々してゐたが、此時つか／＼起ちかゝつて外へ出かける。「何處へ行くかッ」警部が一喝を喰はせると、田萬里は身動きもならず立ち竦む、横合から三宅巡查が進み寄つて、田萬里の肩を引ツ擱んで元の椅子に引き据ゑる。「お知合の仲ですか」警部が中尉に聞く。「なわに、さういふ譯ではないので、お咄するど長いですが、實は此うです、云つて墓場の出來事から縁の懺悔状の事まで簡単に語り殊に「此指環は、柳井初江には無てならんもので、縁との關係を斷つため亡母の片見を通貨に替て此男に與つて居るのです、指環の件に就いては充分貴官のお取調が願たいと思ひます」「宜しい、嚴密に取調べる

考へて居りますが、本人の柳井初江の居處はお分りになつて居りますまいか。「居處は分つて居りますが、初江は友誼を重んじて、決して、口を聞きません、若し、縁が懺悔でもしなかつたら、初江は淫婦として、社會から誤解されるのであつたのです」恰も、中村警部の後ろに立ちながら鉛筆を耳に挟んで、原稿用紙を巻いて持つて居た八字髭は、苦い顔をして脇を向いた。それは半月であつた。かくて藤井中尉は此を去る。活潑な、雄々しい其後ろ姿を見送つた半月は、中村警部の橋手から顔を覗けて、何やら微聲で聞くと、警部は「勿論」と半月を振り向いて、「立派な脅喝取財だ。半月は笑つて領き田萬里の方を見ながら、「何うだ色男。二年も三年も入獄れちや溜らんやア」田萬里は、泣面を掻きさうな顔になつて居る。

(五十五)

「お嬢様」乳母としての懐きへ忘れて、珠は隔ての関を跨ぐと、斯う云つて、初江の側近く膝行り出る。初江は、小泉の部屋を、假の居間に宛がはれてゐるので、床近く据ゑた机に向いて、何やら英書を繕きながら、矢張快々と思案に暮れて居たが、乳母を振り向くと、「おう、乳母ですか、大層早かつたわね、懐しさうに云つて、坐を向き直り「お父様御の用ツて、其際御用？」「お嬢様、お悦び遊ばせ、何も彼も芽出度いこと盡でございます、云ふ顔は、莞爾と、嬉しさが溢れて居る。「芽出度いツて、何んなこと？」「わたあなたのお疑ひが全然晴れましてでございます」「私の疑ひが？」乳母は頷いて「貴女好く御辛抱遊はしました、これが平民の只の娘であつて御覽遊ばせ、假令誓は立てたにせよ、守り切れるものではございません、それに、まあ、お嬢様のお義理堅う、覺ゆもない濡れ衣を着せられながら、知らぬ、云はぬ、と、好くも誓をお通し遊ばしました、それでこそ、一條様のお嬢様で

でございます」と、乳母は腰の扇子をバツと開いて「お出かし遊ばしました」云ひながら、初江を煽ぎ立てる。初江は、きまり悪さうにぞして、「お父様もお得心が入つたのですか」「お得心遊ばすの、遊ばさぬ、段ではございませぬ、奈加は好い子に育て、呉れたのう乳母と、仰せ遊ばして、それはく大のお機嫌で被居いました」「さう、お父様は、亡母さまの事まで褒めて下さつて……」初江は、さる嬉しさに堪へぬ態で「好い子に育て、呉れたつてねね……」云つて覺悟す莞爾する。「それから、お指環でございませぬね、初江は指環を聞く直ぐに羨れる。「姫様、そのお指環も妙な處からお殿様のお手に入つてこれ、この通り、と、帯の間の財布から、紀念の指環を取り出して、丁ど、此にございます、人の道さへ踏みましたら、神様が捨て、お置きはなさいません、其上に姫様は、お友達への」と云ひながら、人助けを遊ばしたも同然でございませぬの、何うして神様だが、放てお置き遊

ばすものですか」「乳母」夢中になつて喋る乳母を、手で制めて「この指環は、何處からお父様のお手に入つたのでせうねね」「それがでございます、好い時には何から何まで好いもので、あなたを、お苦め申した書生の田萬里が警察へ引き出さされて、何彼と嘘八百を並べて居りましたを、藤井さまが立會つて、田萬里に白状させなされたのでございます」「あの行雄さんが立會つて……」初江は一ト膝乗り出して「ちやア、行雄さんにも、私の疑念は解けたのねね……」云つて、莞爾した眼には、生れて始めて覺ゆるやうな、嬉しさと、恥かしさとが漂つた。「それからお姫様、まだ、悦ばせ申しますことがございます、お殿様は、一日も早く、お邸の方へ引き取りたいと仰せ遊ばして、御對面は明日と定まりました、それが爲めに、態々三越をお呼び寄せ遊ばし、明日の日までに仕立上げるやうに、あなたのお召物一際、お殿様御自身に御注文遊ばしました、お頭の物からお履物、お机から御本箱

船來の香水までお誂へになりましてございますよ、お殿様が之れで被居いますもの、家令様から書生女中のお召使まで上を下への大騒ぎで、私のお暇いたします頃は、わあなたのお居間の御掃除最中でございました「初江の頭は、逆上て居るやうに見えた。」

一條大佐は、クリーム色の軍服のまゝで、靴下の爪先に上靴を突かけて、書齋の安樂椅子に凭れかゝつて、居た。軍帽と、サーベルを提げた女中が、「御前さま、お召替遊ばしますか」と聞く、大佐は指を撫でて、まづ、「初江を呼ぶじや」女中は畏まつて、其儘扉の外に出る、こん度は紹羽織に、小倉袴の川澄家令が、よぼく、と入つて来て、「御前、最中や日暮に間もござりませぬが、御入浴後御對面遊ばしては如何でございます、云ひかけて大佐は好くも聞かずに、「なに、入浴は後で緩々とするぢやよ、まづ、初江を呼べ。川澄兩は手を垂れて、一應は畏り乍ら、お「姫様は、只今、お仕

度の最中でございます、御前さまも……」いふを大佐は打ち消して「何も仕度するには及ばぬ、初江の心は、既に見とるから、今度は初江の顔が見たいぢや」云つて、卓の上の葉巻を撮み上げると苦み走つた大佐の顔には、晴れやかな微笑が漂つて居る「重ねて申上げる詞とてもござりませぬ」川澄は恐入つた態で、白髪頭を低く下げて、「其由 急いで、お姫様にお傳へ申上げますでござります」家令が引き退つた後、大佐は葉巻に火を點けて、兩脇を脇掛に置きながら、緩く、靜に、蓑を輪に吹く、紫の煙が、窓から吹き込む風に揺れて、得ならぬ骨の四邊に熏する。日は、綠葉に遮られて、開け放した窓からは、新緑色の弱い明になつて射し込むのである、室は、十二畳もある洋間で、天井も壁も眞白である、床に敷き詰めた絨氈と、卓にかけた覆と、手繰り寄せられて窓掛の色合が、配合よく、いかに涼しい。「お殿様が、お待ち兼で被仰いますといふ女中の聲が、つい、扉の外に聞える

大佐は、葉巻の口から離して、沈と其方へ眼を放つと、左の肩頭から、脇下に垂れかけた幾條かの飾紐が揺れて、胸の菊花が燦然と輝く。扇の引手が外から動いて、静々と現はれたのは乳母である。續いて、温雅に入つて來たのが姫様の初江で、扉の外には家令、川澄、大尉の小泉、其他大勢、靜肅に差し控へて居るらしい。初江は、多量した髪を廂にとつて、金の輪轡に、白樺花の簪を挿し、襟白く袖口、八ツ口は淡紅色を見せ、羅衣の紋服に、滋味の勝つた草模様のを締め、白足袋に上靴を穿れて乳母の隆に俯いて立つ。御前、乳母が、先づ口を切つて、遠くから男爵を仰ぐ。一條正治に嫣然に「うむ」と頷いて、「彼が初江か」「お姫様」お珠は、初江を振り向いて、「彼處にお居で遊ばすのが、貴女のお父君で被居います。初江は少し頭へながら、盗み見るやうに、上目をつかふ。邸内は森として、がさくと葉摺の音が微に聞ゆるばかり折からの蟬も鳴かぬ。正治は、さも、満足の

赫で、蕘の火を消したにも氣附かず、矢張、其蕘を持つたま、で、莞爾と恍るやうに見てゐたが、初江の眼と、自分の眼が見合ふと、椅子の端まで腰を進めて、「ふむ、初江か……」腰を浮かせて立ち上る、蕘がぼとり床へ落ちる。「お父様……」初江は馳せ寄り、脚下に膝を支いて正治を見上げ、「お懐しう存じます……」云つて、半幘で顔を覆うて、腰の邊に縋り附く。正治は、とつかと、椅子に臀を支き、眼を眠つて、天井を仰ぐ。お珠は、懐紙で、眼を壓へて居る「亡母さまはお一人で……」初江が涙聲で語りかけるを、正治は、初江の肩に手をかけて「分つとる、分つとる、これからは乃公とお前と二人ぢや、仲好く暮らして、死んだ母様を美ませるぢやは、は、は」大佐は笑ひ泣をするのである。

桃山赤十字病院の應接間の室で、初江と縁と對向つて居る。「好く分りましたね、私の歸つてることが？」縁は珈琲茶碗を取り上げる。「それは分つてよ、何時までも私は、義妹なんですもの、義姉さまの歸つて被居る位の知れますわ」云つて、初江は、熟々と縁の顔を見て「老けましたわね、義姉さまは」縁は茶碗を卓子に置いて、右手で底髪の鬚へ觸りながら老けて？」「老けてよ、苦勞なすつたでせう？」初江は、痛々しい眼色をする。「苦勞したつて、自業自得ですわ、老けたのは歳の故よ」「歳つて云へば早いものね、貴女が家出なすつてから最う一年になつてよ」「あの當時は、本當に初江さんには迷惑かけてよ、私、御恩は何時までも忘れないことよ」「あら、あんな他人行儀を被仰るわ、あの當時のことは五分五分ですわ私、あなたの懺悔状で、父に對面が出来たんですもの」縁は話を變へて「近頃、矢張御勉強なすつて？」「勉強つてことはないんですけれど」と初

江は初心らしく云つたが「家庭教師に語學と音楽を教はつて居ますの」「音楽を？」好いわね、バイオリン？ピヤノ？」「両方……、だけと些ども進歩しませんの、語學だけは義姉さまのお仕込で、大分ものになつてよ、今月から英語の外に佛語を學つてますの」「さう……」「縁は、急に萎れて、あなたはお父様が御健康だから好いけれど、私は母が彼わなんです、もの……これ皆私の爲めです、私のやうな不孝ものが、またとあるでせうね」泣きさうな顔で云つたが、父から手紙でも呉れなかつたら、まだ名古屋に居たかも知れなかつたのよ」「おう、私は……」「初江は自分で呆れて「夫人さんのお見舞に來て居ながら、勝手な咄ばかりして居て」「あら、それぢや、私を訪ねて下すつたのぢやないのね」縁は活々とした顔に戻つて、怨ずるやうな眼で、初江を見ながら微笑む。「兩方を兼ねて、すわ、此へ來れば、義姉さまにも逢へると思つたからよ」云つたが、更に改まつて「夫

人さんの御病氣は何なですの？。少しは好い方？」縁は軽く頭を下げて「有難うよ、お蔭さまで神經は全然好くなりましたの、だけと、衰弱して居ましてね、それさへ恢復したら大丈夫なだけと」眉に雲がかゝる。「神經は好くお成りなすつたんですね、それが何よりですわ、これからは、附添ふ人の看護が大切よ、云つて後ろを振り向き、椅子の根に先刻から、畏まつて控へて居る侍女らしい女に目くばせする侍女は重さうに、縮緬の包を卓子の上に載せて「粗末なものでございますが、御姫様から奥さまへお見舞のお印まで」と、縁に會釋する。縁は、椅子から立ち上つて「初江さん、こんなことをして戴いては厭ですよ」「お見舞になんて、差上げるやうなものぢやないの、お賞ひ物の裾分なんですわ」云つて、縁と目を見合はす。「母が、何と云ふか、知りませんけれど……」縁は、包を提げて室を出る。硝子窓の外は芝生の褥色が見えて、黄色くなつた木の葉が、日の目に片々と光

つて落ちた。

(五十八)

患者服を着けた八字髭の男が、三號室の戸口に立ち止つた時、戸内から白衣の年若な看護婦が顔を覗ける。「おう、岸さん」男の方から聲をかけて、「村山さんはお寢みかね」看護婦は、色目を使つて「嬢さんは、お不在ですよ」昂然とした口調で云つたが直ぐに眞面目くさつた顔になつて「そんなに

お出歩きなすつちや好けませんよ、お薬は最う服用つたのですか」「薬のやうな苦いものは、お召し喫りにならんのだ」男は、態と濟し込んでいふ。「おや、強氣ですこと、明日は退院なさるんだと思つて、俄に空元氣が出来ますのね」「空元氣ぢやない、本氣だよ」「それは、村山の嬢さんにせう云つて、看護婦は逃げ出したが、また、一ト歩づ、近寄つて「内田さん」と

男の患者服の袖を曳いて「貴郎が退院なさるとね、焦れ死に死ぬ人が二人
 わりますよ」男は、純金指環を、二本まで拵めた右手で、髭を捻りながら
 「其一人は岸さんと被仰る方だらう」「へん」看護婦は、右の掌で鼻頭を
 古摺つて、其手をぬツと男の鼻頭に延ばし、「お門が違ひますよ」「よし、
 春田夫人」男が笑つて云ふと、看護婦は一時に俏けた振をして、「内田さん
 には、眞實に適はない、何れ敵は打ちますよ、覺て被居い」横目で昵と
 睨め附けて、横に發達したやうな牀を、すつすと向うへ運んで行く「内田は
 吹き出しさうな顔を、洗と噛みこたへて、屏の中へ眞顔で入る。「奥さん」
 内田は寢臺の側に入つて「お氣分は如何です？」寢臺の上の、婦人患者は瘦
 せた蒼褪めた顔を向けて「おや、内田さんですか、有難う、大分好い方で
 ございます、さア、おかけ遊ばせ、私は只今熱を計つて居りますから、此儘で
 失禮いたします」「どうぞ」内田は片邊の椅子に掛ける。「貴郎は、明日御

退院ですつてねわ、お芽出度う存じます、當分はまた淋しくなります」「お
 陰で彌々放免されましたは、と金齒まで見せて笑つて、「奥さんも
 曠さんが忠實に御介抱なされるから、御退院には間もございませぬよ」「はい
 彼れが来て呉れましたので、大層氣丈夫に思ひます、一時は、彼れも居りま
 せんし、甥も演習で留守をして居りますし、良人は御存じのやうに出歩いて
 ばかり居る人ですから、雇人ばかりの宅が氣になりました、神經にも障つ
 たやうでございましたが、甥も一兩日前に歸つたさうですし、縁も、彼わし
 て此地へ歸つて来て呉れたものですから、何んなに安心いたしましたか知れ
 ません」「すると、曠さんは東京の方にでも？」「いね、名古屋に知己があ
 るものですから其方へ遣つておりましたはア」「爾うでございませぬか、當分
 は、此地で御奉職でもなさるお考へですか」「い、ね、もう教育などはさせ
 ません、何を申しましたも、獨娘の事ですから、相當な婚でも見附かりま

したら、早、縁付やうと思つて居ります。「まだ、お若いから、お急ぎにな
 る程のことでもございますまい」「なか、あれで年を取るのでございま
 すよ、時に、内田さんは奥さまがお在りなされるのでございませう」「どこ
 が、獨身です、婆さんに、男ばかりの所帯を持つて居ります」「良人も爾う
 申して居りましたが、然しお郷里に、お在なされるのでございませう」「一向
 無です、お知己甲斐にて、お厄介を煩はすかも知れませんが、は、は、は」「そ
 れは、御不自由で被居いますね、お役所の御支配なされるのに、御勝手が
 お悪うでございませう？」「大に悪いですなア」笑ひながら、濃い立派な髭を
 捻る。此處へ、突然這入て來たのは村山彌八郎である。

(五十九)

彌八郎は、羽織袴を、しやな、云はせながら入つて來て、内田と顔を

見合せると「やア、其後お見舞も致しませんが、御病氣はいかゞでございま
 す？」内田は椅子を離れて「村山さんですか、笑顔になつて、お陰で、いよ
 〱放免、言渡されました、もう大丈夫です」「それは何より結構です、會
 議所の方でも、是非貴郎に御相談を願はんければやらんことがありまして、
 實は、御容態を氣遣つて居りましたが、それを私も助かります、早速ちやが
 内田さん、彌八郎は内田と並ぶやうに椅子にかけて「製鐵場の方の口ですが
 どうです、商業會議所の方を離れて、甘澤支店長として働いて下すつては、
 斯う申しては失禮ぢやが、資本が要るなら十萬や十四五萬は私から用立てま
 すがね」云つて、内田の顔を睨る。内田は、一つ辭儀をして「さうして戴く
 と、私も大に男振を上げるところです……」「良人、良人」寢臺の上
 から、邦子が彌八郎を呼んで「内田さんは御親切に、毎度お見舞ひ下さるの
 ですよ、良人からお禮を被仰て下さい」「さうか、さうか」彌八郎は頷い

て、内田に向ひ「毎々、愚妻をお見舞ひ下さるさうで」と、禮を述べる、内田は取り消して「退屈紛れに、私からお邪魔に上るのです、お禮を云はれては痛み入ります云つて、可愛らしい笑顔を、色白な兩の頬には、人を魅するやうな笑凹まで浮いて居る。「そこで、事業の方ですて」彌八郎は、また詞をつゞける「師團の方へ、交渉でもする必要があるなら、適當な人に知己がありますから其人に頼みます」「ちや當時師團の參謀長で却々の顔利です」「參謀長と云へば、一條さんちやありませんか」「左様々々」彌八郎は扇子を使つて居る「一條男爵を御存じですか、却々人物ぢやさうです、ね、私も一度、知己になりたいと思ひますが」「機を見て紹介せませう、私も妙なことからお知合になつたのですよ、あれで、舊華族だけにこれがありますからなむ」云つて、指で環を拵へる。「さうですつてね、それも聞いて居ります、是非一つ、紹介して下さい」二人が、夢中になつて咄て居る所

へ、縁が、重さうに包を擡げて来て、内田の姿を見ると、少し顔を赤くして「被い、いまし」と挨拶する。内田は、仰山らしく「やア」と云つて、嫣然笑ひながら「お邪魔をして居ります」縁は、また一つ頭を下げて、父にも禮く會釋して、邦子の側に進みより「阿母さん、これをねね」包を枕元の藥臺に載せて「初江さんが貴女にお見舞ひですつて、何うしませうかね、戴く分には行かないでせう？」「初江さんから……」邦子は、身を責めるやうに云つたが、彌八郎を見向いて「あなた、何ういたしませう？」「何うする」と云つて、返す譯けには行かない、折角のお芳志ぢや置きて置きなさい、後で何かお返禮をするぢや」「戴くのですか、阿母さん？」縁が邦子に聞く邦子は、濟まぬらしく、力ない聲で「お父さまが彼んなに被仰るんだから、戴いて置ませうよ」「さう」縁が包を解いて疊む、中には、舶來品らし、入りの洋菓子、半打も括つてあつた。邦子は、寢臺の敷布の上に俯伏

して。「初江さんに、邦子が、泣いてお禮を申し上げたと云つてお呉れ」云ひながら、吃逆上げて、懺悔の涙に咽ぶのであつた。

(六十)

「内田さん、もう結構です、御病氣に降つてはなりません、何うぞ關つて下さるな」彌八郎は長い廊下で振り向いていふ。「運動勞々ですから、支關まで送りませう」云つて内田は矢張徒いて来る。長く敷き詰めた絨氈の上を微に迂る上靴の音が、高い兩側の壁に反響して、しやらくと鳴る。二人が、立ち並ぶやうにして、應接室の前まで来か、つた時、其室の扉が内から開いて「結構ですわ、義姉さま」いふ聲が、優しく聞えて、廊下へ出て来たのは初江であつた。彌八郎は立ち止つて、「初江様ではございませんか」と立ち止る。「初江も其れと見て、小父さまで被居いますか」「只今は、御町

噂にお見舞まで下さいますして」「小母さんの御病氣も、大層好い方でございますつてね、御安心で被居いませう」初江の立姿を、彌八郎の後ろに立つてちよいと見て居るのは内田である。「さあ何うぞお先へ」彌八郎が無理に初江を先に立て、「暫く、お邸へも御無沙汰いたして居ります、お父様も、お變りはございませぬか」「はア、相變らず、達者で居ります」「それは何より、お歸り遊ばしたら、村山が宜しく申して居りましたとお傳へ下さい」「彌八郎と初江と、唯ながら先に立つ後から態々少し遅れて、内田は、縁と並びながら「彼れが一條男爵の姫君ですか」微聲で聞く。縁も微聲で「あれで語學が甘くて、音楽に堪能で被居るつて、まだ、少阪の交際場には顔出しをなさいませんが、婦人界では評判な淑女ださうでございます」内田は顔と頸を揺る。眼は、初江の後ろ姿に恍惚れて居る。お太鼓に結んだ高貴織の丸帯や、絹お召の襟にかけた細巻の金鎖や、烏羽色の二巻を

園だ純金の輪櫛などが、四邊を拂うて輝いて居る。緑は、雪のやうな初江の襟筋を見て。大阪の上流社會では、一等の美人といふ評判でございませ、また、中流、下流を通じて、あんな美人はございませぬわね。」爾うでせうね。」内田は矢張首を捻りながら、風が吹き送る香水の香を嗅いでゐた。お伴の侍女が、先廻りをして下足札を渡し、下足番が、叩士間に空氣雪駄と利休を描へて出すまで、彌八郎も初江も玄關口に立つて居る。彌八郎は其間に振り返つて内田を向く、緑は初江と並んで立つ並んで立つた二人の姿は衣裳から、貌形まで、主人と召使ほどの違ひである。彌八郎は内田に向つて、「此方が、先刻お話し上げた男爵家の令嬢です、御紹介ませうか。」

「こんな風俗では、失禮ではないでせうか。」彌八郎は初江に向つて、「初江様こんな處で甚だ恐縮ですが、御紹介申上げたい人がございます。」初江は軽く、「はい。」彌八郎は内田を引き合はせて、「これは、甘澤支店長で、商業

學士内田一郎君でございます。」今度は、内田に向つて、「この方が一條男爵家の令嬢初江子様です。」内田一郎……と聞いて、初江は倍と内田を睨めハツと思つた態で、一歩進み出た。「内……」云ひかけたが、沈と唇を噛みこたわて、「何卒、お見知り置き下さいまし。」途切途切に云つて、差し俯く頭、薄い紫色の簪がぶるくと顛へて、顔は、血の氣もなく蒼蒼めて居た。やがて、初江を中にして、彌八郎と侍女の前後した三輛の俥が、がらりと水色の院門を曳き出された時、前刻の看護婦が拔足で寄つて来て、内田の脊中をどつと押す。恍惚るもんちやありませぬよ。」云つて腹を抱へる内田はニツともせず、「不思議だ……」矢張、首を捻つて考へて居る。秋の日は西に傾いて、鶴翼を張つた雁金が高い空を渡つて居た。

「藤井君ぢやないか」車上の脊廣は聲をかけて、車夫に俵を止めさせる、難波橋を手前に來か、つた鳥打帽は立ち上つて振り向き「うむ、内田君か」背廣は俵を返して、橋の欄干近く立ちながら「久瀧だね其後お變はありませんか」軽く鼠の中折帽を脱る。「有難う」と、藤井も褐色の鳥打に手をつけて、心持辭儀を返し「君が、大阪に居るといふことは伯父からも聞かぬし、伯母からも聞いた、まだ意外な人からも耳にして居たが、お訪ねもしないで失敬した」何、それはお互ひさまだ、併し相變らず健康だね」「うむ、身體はお見かけの通りだが、軍人は駄目だよ、何時までも貧乏でね、そこになるや君などは氣樂だね、殊に此地へは非常な榮轉だつてね、伯父も、君の事は褒め干切て居る」「駄目だよ、表面ばかりは好き、うだが、内其部は火の車だからね、時に、伯母さんの御病氣はどうかね」「有難う、二三日前に退院した、入院中は君に一方ならぬ厄介をかけたさうな、伯母も大

に感謝しとつた」「何方が厄介になつたのだか、分ちの附かん位なものだが」と笑つて、併し退院とはお茅出度い、一度お訪ねしなげやならんのだが今に御無沙汰してゐる、君かう宜しく云つて呉れ玉へ」「わア、承知した」「君も些と訪て來てはどうかね、酷く見限つたものぢやないか」内田は笑てゐる。「見限つた分けぢやないのだが、何を云つても束縛された身だからね、弱つたふよ」嘘らしくもなく云つて肩を擦める。内田も頷いて、「こんな處に立話もをかしくないが、公園でも散歩しながら話さう、それとも急ぐかね」「何、急ぎはせん」「ぢやア、付合ひ玉へ、折角久振に逢つたのだから、最少し話さう」二人は橋を渡つて、公園を歩きながら話合ふ。「時に、君は一條家と往復するさうだね」内田はステツキを脇挾んで、アルマに火を照けながら横目を使つて見る、藤井は紺の兵古に左手を挿し込み、右手で洋杖をこつこつといつて居る、藤井の緋の書生羽織と、内田の玉羅紗の

洋服とは朋友とは思へぬ程に、段階が附て見ゆる。「一條家？」藤井は、淺黒い男らしい顔を向けて好くも往復せぬが、時々訪ねる「内田は、金の指環を二つも嵌めた左手でアルマを挟んで、細く、遠くへ煙を吹きながら、妙な目附をして居たが「彼家に、評判な令嬢が居るだらう？」云つて、意味ありげに藤井を見向く、藤井は平氣な顔で「居るとも、君の初江さんぢやないか」「初江……」矢張さうか、といふ顔をしたが「君の……とは痛み入つたねね」快さうに笑つてゐる「君も随分、酷なことをしたせ」廣島當時かね、は、は、と内田は笑つて「あの無教育な初江かね、一條の令嬢が……變れば變るものだねね」「今は君のお蔭で、初江嬢も却々教育ある淑女となつとるよ」「僕のお蔭は酷だが、世間知らずの初江には、僕の冷遇が非な刺戟を與へたのかも知れないね」「君は意外に感ずるだらうわづか、僅に一兩年間に華族の令嬢となり上つてゐるには」「さうでもないね、薄

く旦那の落胤とは聞いてゐたから、男爵と云へば一條さんは少將に昇進されたねね、今朝披露宴會の招待狀が來た」二人はホテルの前まで來る。「明日だね、行くか君は」「非是行かうと思つてる」内田は立ち止る。藤井も立ち止つて「ぢや、明日また會はう」帽を脱る。「それは無論遇ふさ、今日は僕に付合ひ玉へ」内田は金側をパチンと開けて「もう彼れ是れ四時だ、晚餐をやらうぢやないか」時計を衣囊へ落しながら「廣島の濱吉以來だ」云つて藤井をホテルへ連れ込んだ。

(六十二)

開け放した洋室には金光に着飾つた四師團長、大阪府知事、それから態々京都から出かけて來た子爵、男爵の新華族、公卿華族の歴々が、大卓子の、目も覺める程に生け込んだ大花瓶を圍んで、ナイフと戈をがらや

云はせながら、快談に頭を解いて居る。主人側は、新任少將の一條男爵である。羽織袴の扮装で、濃い黒い髻を撫で、切に悦に入つてゐる。豫備中將の郷田男爵は、コツアの三鞭酒をぐつと呷り「一條、貴公、妻君賞はん。淋しがるばい、乃公、心當りの婦人のあるが、賞ふ氣のなか」一條男爵はナイフを置いて「貴公の心當りは、祇園の大夫とんぢやる、は、」一座は、腹の皺を集める。「御前」一條男爵の後ろから、怖々頭を下げたのは銀行員の林である。「おう、林さんかい。快云つて椅子を振り向ける。「甚だ御馳走になりました、御禮の申上げやうもでざりませぬ。今日はこれでお暇頂戴仕ります」恭々しく腰を折る。「それや可かん貴下は廣島から態々出て來れたのぢやから、二三日は逗留して賞はんどならん、今に、餘興も始まるぢやろ」云つて、書生を呼び「この方は、初江の厄介になつた廣島の林さんぢやから、川澄に好く待遇と云へ」左様に仰せ下

さりましたは、恐れ入ります」林は、心底恐れ入りながら、書生に導かれて室を出る。「御前、今度は村山彌八郎が和服の禮装で入つて來て「御前に、お知己になりたいと懇望致しまするものがでございますが」云ひ憎さうにいふを、一條男爵は合點んで「わ、好しく、日外お咄しの内田といふ人ぢやう、通しなさい」一條の顔は赤く熱れて居る、彌八郎も赤くなつた額をてか／＼と光らせ、すらりとした、フロツクエートの若紳士を紹介する。「此仁が、内田一郎氏と申す甘澤の支店長で」一條は快く領いて「乃公が一條正治ぢや、以後宜しく頼む」内田は男爵に先を越されて、少し慌て氣味で「お見知り置き下さりますやうに」と初對面の挨拶が済むと、更に昇進の祝詞を述べる、なかに、碎けた應對振である。一條男爵は、昵と内田を見て居たが、村山に向いて「村山さん、内田さんを模擬店の方へ案内して下さい。今に餘興も始まるぢやらうから」内田と村山が會釋して其處を辭

する、一條は後ろから「何にも馳走はないが、何うか緩寛やつて下さい」秋の日は今が關である、廣い庭園の彼方此方に、禮服の男女、三々五々と往來して、萬國旗を掲げた餘興場から、思ひ思ひの趣向を凝らした模擬店の看板が常盤木の葉隠れに窓から遠く透いて見える。「閣下」また、後ろに聲がする、それは軍服の藤井行雄である。男爵は振り向いて。「おう、藤井中尉か」嫣然な顔である。「閣下、お祝詞を申し上げます」行雄は帽を脱つて兩手を垂れ、直立不動の姿勢で活潑に上り身を斜に屈める。一條男爵は、さも満足に領いて「乃公は、此奴の祝詞を一番に嬉しく受けるぢや」云つては、いゝと笑ひながら一座を見廻はす。「藤井中尉」師團長は行雄を見向いて「貴公は一條の賀にならにやならんぞ」眞面目な顔で云つて、今度は一條男爵に向ひ「一條、貴公、藤井を賀に持つちや何うぢや、乃公が世話をするが？」「師團長」男爵も眞面目になつて「謀介役になつて玉るか」「う

む」師團長は首を傾かせて「藤井なら貴公も兎角はわるまい、喃喃田」郷田男爵は顔と賛成して「それやわ好か事ぢや」行雄は直立したまゝ、初心らしく顔を赧める。庭園では、玲瓏とした樂の音が起る。

(六十三)

「お姫様、何を憂々しておいで遊ばします、今日はお父様の、お芽出度いお祝宴ではございませぬか」初江の居間に伺候した乳母の珠は、机の前で何やら物案じて居た初江を見附けて、斯う聞くのである。初江は態と頭を掉つて「何も憂々しては居ません、先刻から引き續いての接待に疲れて、今お休みをして居る處です」事もなげに云ふを、珠は尙は氣遣はし氣な眼の色で、「お附添へのお女中から聞きましてでございます、貴女は、病院へ村山さんをお見舞にお行で遊ばしてから、何やら御案じ遊ばして被居るさうでござい

さすが、何か、御心配事でもお有り遊ばすのではございませぬか、姫様、屹度さうでございませう？」初江はハツとした態度、涼しい眼元を睜つたが、直ぐに、さあらぬ林に戻つて「乳母の、何をお云ひかと思へば……」嬌然と、妖艶に笑つて見せて、今、餘興の始まつたところね、乳母」と、當もないことを云ひ紛す。「姫様、乳母は、それには答へず「これから、一條家を御相續遊ばさねばなりませぬ、御大切なお林、殊には、御交際場裡にもお顔出しを遊ばして、一條少將の御令嬢、御當家のお姫様とお誂はれ遊ばさねばなりませぬお身の上で被居いますゆゑ、充分お品行にお注意遊ばし、決して浮いたお心をお出し遊ばしてはなりませんよ、かう申し上げては、舊弊な老人の生意氣よと御笑ひ遊ばすか存じませぬが、日本は昔からの習慣もございまして、一家中に舅、姑も同居致します家族制度とか申す國でございまして、近頃女學生中罰で流す、と申す自由結婚などは、一生を長

く契了せるものではございませぬ、賀君の御撰定は、必ずお父様にお任し遊ばしませ、とんな、おエライお方でも、若い時は迷ひ心の出るものでございまして、その上、戀は盲とか申しまして、何んな、險呑な人の手に手引きをされるか知れませぬ、危い淵に陥つてからはもう取り返しは附きませぬよ、く、お考へ遊ばして、今少時の御辛抱、必ずともに、男子の口車にお乗り遊ばしますなや」「乳母、初江は倍と面を擧げて「御親切有りがたう、亡母さまの御教訓もお前のお云ひの通りでした、私は身に沁みて嬉しく聞きます」「好く被仰て下さいました、それでこそ御殿様の姫様で被在いますホツと胸を撫で下して、お珠ははくく嬉し笑ひをするのである。一姫様裾を長く曳きながらお珠の後ろまで歩みよつて「私、姫様にお取次いたします、若い紳士の方あなたに、逢ひたいと云ひます、應接室にお通し申して置きます、一三、五、西洋婦人で、初江の家庭教師である。」「先生、初江は立ち

上つて、教師と握手の禮を替し「お勞れで被在いませう、接待も随分骨が折れますわね」
 「姫様の評判、大層よろしくあります、私、勞忘れて了ひます」
 「有難う」
 初江は感謝して「そして誰でせうね、紳士は？」
 「内田さまあります」
 初江の顔は、見る／＼蒼くなる、乳母の眼は、きつと睨られる。

(六十四)

應接室の卓子を扱んで、内田と初江が對向つて椅子に掛つて居る。「初江さん」
 内田は優しい聲で「お變りもなく御結構です」
 「有難う存じます」と、初江は、明瞭とした聲である。眼は始終俯けて、三枚襲の秋草の裾模様から、内八文字に描へた白絹足袋に落して居る。
 内田は、初江の高島田に純金前挿の頭から、富士額の厚化粧まで、今更に惚々として見て居たが。

「初江さん」と、また聲をかけて「貴女は、五年前の夏の夜整狩に行つてお約束したことを、もうお忘れになつたでせう？」
 云つて、白い顔に、笑面を彫りで見せる。
 初江は頭を上げて「それは、私から申上げることではございません」
 云つたが、内田の顔から、眩さうに、眼を反せて、また俯いて膝を見らる兩手は、膝の上で、桔梗紫の半帕を弄つて居る。
 「これは妙なことを被仰る、私は此五年の間、一日として貴女のことをお忘れしたことはありません」
 初江は無論のことです「眞しやかなる口上である、それは、何故、お手紙の御返事を下さいますか？」
 「其都度差し上げて居りました」
 「私は一度も戴いた覚えがありません」
 「これは可怪しい可愛らしい眼を睨る初江は、其れを盗むやうに見上げて、懐しさに胸を躍せながら、沈と血を静めて「それは何うでも宜しうございます、内田さん、あなたとお約束した初江は、亡母の墓場の前で、美事に自殺いたしましたして、此に居ります初江は」
 云ふ間に

顔は、櫻花のやうに染つて我れにもなく力ある聲で、「藤井中尉に救はれた
 初江でございませす」素張と云ひ切つて、つと立ち上る、わな／＼と身内は慄
 へて目は霑んでゐた。「初江さん」内田も椅子を離れて「ぢや、此内田を捨
 て、藤井と結婚のお約束でもなすつたのですね？」いふ眼は、燃れてゐる
 やうに見えた。初江は、往きかけた足を確と止めて、犯し難い姿で内田を振
 り向いて「内田さん」聲も靜肅な調子になつて「教育のなかつた初江は、貴
 郎に欺かれて結婚のお約束をしたか存じませぬが只今の初江は、自由に良人
 を撰定することの出來ぬ身となりました、私は親の命に由つて進退します、
 私にお約束なぞ致したことはありません」云つて、また行きかける。内田は
 馳せ寄つて、初江の脚下に躓き、「初江さん、過去の罪をお許し下さい、
 私は、神に誓つて、貴女を愛します、永劫變らず愛します、何うか、許す
 と被仰て下さい、そして、五年前の内田と思つて、貴女も、愛すると被仰

つて下さい……」誠心は美しい面に溢れて居る。初江は、半袖で、涙を壓
 へて居る。「初江さん、世に初戀はと、神聖なるものはありませんよ」云つて
 下から昵乎と見上げる、初江も上から昵乎と膝下したが、二人の眼の見合つ
 た時、初江はワツと泣いて「その神聖の初戀を、貴下はお穢しなすつたので
 はございませんか……」。「だから、懺悔いたします……」。「お嬢様」そ
 こへ乳母が入つて來た。内田は、彈かれたやうに立ち上り、初江は乳母に寄
 り縋つて泣く、この、奇異の光景に、珠は呆れて眼をさよるつかせたが、
 「お嬢様、お父君のお召しでございませす」初江は悄悄と曳かれて行く、後に
 内田は、茫然と間、抜けた顔をして居た、戸外は陽氣な小春日和で、喝采の
 音が霞のやうに餘興場から響いて來る。

* * * * *

それから問もない後の事である。廣島牛田村の柳井奈加子の墓前に参拜した三人の男女があつた、一人は男爵一條少將で、一人は大尉一條行雄、一人の若い女は、一條大尉夫人初江であつた。

甘澤支店長内田 郎は、村山縁と大阪製鐵場の竣工を待つて、華燭の典を擧げるとのことである。

戀しき仇(終)

大正三年五月十七日印刷
大正三年五月廿二日發行

戀しき仇
花鳥叢書

著者
所
有

【錢五拾貳金價定】

編輯兼
發行者
樋口源次郎
大阪府區豐谷仲之町
二百二十四番屋敷

印刷者
田中松之助
大阪府區大寶寺町仲之町
六十五番地

發賣元
樋口隆文館

大阪府南區三休橋鍔谷南へ入西側
振替口座(大阪八七九七)

和田天華君作 前野春亭君畫

悲哀 靜子

木版極彩色密畫挿入
全三冊
各一冊實價四十五錢宛
送料内地に限り不要

悲むべき運命のもとに生れ來りし主人公の靜子は、世に最も多く同
情に値する薄倅可憐なる女性の一である！冷酷なる社會と無情なる境遇
は、性情玉の如く、操行雪の如く、純潔無垢なりし彼女を壓迫して、女
教師より藝妓に、藝妓より女優に、敢て自其身を墮落せしめた、可驚
の變化よ！可嘆の墮落よ！境遇變化の動機は何？ 噫！悲痛凄慘
讀むも涙である！

渡邊默禪氏著 長谷川小信氏畫

事實 怪の怪

表紙口繪共極彩色美本
實價各一冊 四拾五錢
郵税 一冊 六錢

これは文名東都に鳴る渡邊默禪子が、天馬奔空の
快筆を揮つて、黒石子爵家大波瀾の真相を描寫し
た、奇々怪々の怪小説であるから、是非一冊は購
て見玉へと、隆文館の主人が御勸告をする……

神田伯海講演
高橋舟齋君畫

講談 滑稽揃

全一冊讀切 頗美本
正價 金貳拾五錢
郵送料 金四錢

本書は演者の最も得意とする至極趣味に富める一席讀
切物にして、新聞紙上にてても好評を博せし一讀抱腹絶
倒すべき愉快々の好讀物なり、乞ふ愛讀せられよ。

伊原青々園君著
井川洗厓君畫

都新聞
掲載小
迷ひ子

實價各一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢

著者青々園君の文は、既に世に定まれる評あり本篇は
曾て都新聞に連載せられ、讀者より非常に好評を博せ
し小説なり、以て内容の如何を察せられよ。

渡邊默禪君著
長谷川小信君畫

鬼梶原

實價金四拾五錢
送料金六錢
極彩色美麗木版畫挿入

本篇は、大阪時事新報紙上にて大好評を博し、又、劇に演じても大入
大當を取りし、素敵に面白き奇小説である、著者は御馴染の默禪先生
繪も御馴染の小信君の筆、文は繪の如くに、畫は文の如くに、文裝双
つながら艶麗無比、真に近來の好讀物である。

小嶋孤舟君作
長谷川小信君

大阪日報
掲載小説 **浪がしら**

實價各一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢
頗美本

これは新聞紙上でも大好評を得、續いて演劇でも活動
寫真でも、いづれも非常の大入大當を取りましたる、
素敵に面白い悲劇的新小説でござる。

小川霞堤君 合著 長谷川小信君書
黒法師君

家庭小説 **戀しき仇**

實價 四十五錢
郵送料 六錢

これは新聞紙上で好評を博し、劇に演じてても大入
大當を取りました、頗る面白い悲劇的新家庭小
説であります。

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記
鈴木錦泉挿畫

初編	眞田鬼彈正	頗美本
二編	保科槍彈正	特別實價一冊 金三十錢 郵送料一冊に付 金六錢
三編	高阪智惠彈正	三冊まで 金八錢

これは御馴染の玉秀齋翁が、古來有名なる武田家の三彈正、眞田鬼彈正、保科槍彈正、高阪智惠彈正……此三豪傑の勇ましき一代記を懸河流水の快辯を揮つて、縦横自在に演述したのでございますから、まことに近來の好讀物でございます。

神戸又新日報掲載
同記者中村兵衛著
長谷川小信畫

探偵小説 **血染の手巾**

表紙口繪共極彩色美本
實價 四拾錢
郵税 六錢

この血染の手巾は神戸又新日報紙上に連載して、大好評を博せし探偵小説である。可憐花の如く妙齡の一佳人は、可恐殺人の嫌疑者となつた。吁、實に大疑問である、外面如菩薩妙齡の一處女、什麼に迫つて敢てこの大罪を犯せしもので、吁、疑問實に不可解の大疑問である、此大疑問を解せんが爲に、如何に探偵が惨憺の苦辛をするか、これ一篇の讀みどころである……

稻花生著

小車新三

表紙口繪共極彩色美本
實價 一冊 四拾五錢
郵税 一冊 六錢

小車新三とは

何物であるか

武士か町人か

遊俠の徒か

如何なる時代に

如何なる活動を

したか………

274
869

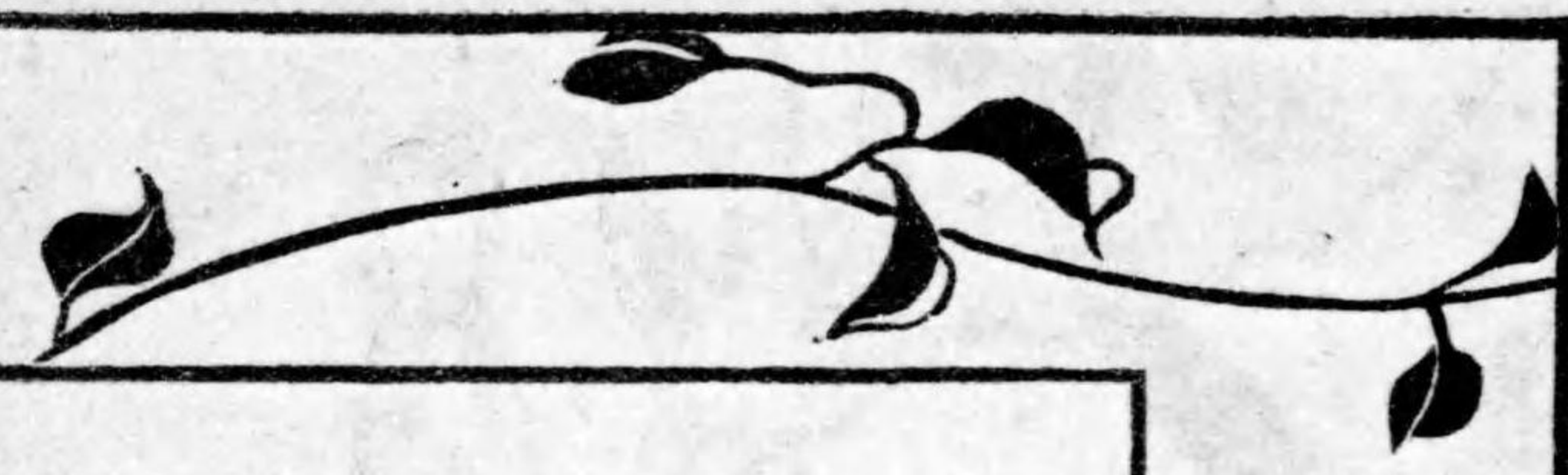


花鳥叢書目次

船	庚	幽	諸	小
越	申	靈	岡	松
浪	山	狐	半	一
花	悪	塚	之	羽
百	由	來	亟	齋
人				士
斬				

花鳥叢書はこれ
讀も至極面白

春



花鳥叢書目次

佐	祐	勢	中	龜
武	天	策	條	井
里		輪	兵	新
佐	吉	城	庫	十
内	松	大	之	助
		仇		郎
		討		

花鳥叢書はこれ
讀も至極面白



終